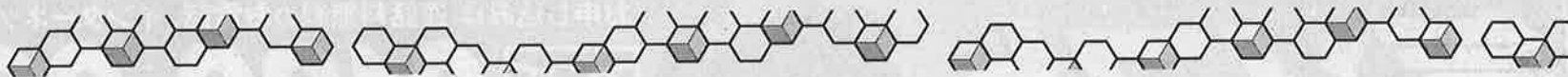


ひょうご 選書



香川晋平著

「できるつもり」が会社を潰す

利益貢献の発想説く

日常会話を題材に

音程の高さを瞬時に識別する能力を「絶対音感」という。本書のキーワードは、副題にある「絶対黒字感覚」。会社に生じるコストを漏れなく把握し、それを上回る収益を上げようとする感覚を指す。会社に利益貢献するための発想、考え方を公認会計士の視点で詳述している。



上司への報告、顧客との商談や、居酒屋、女子トイレでの会話などをもとに、黒字化に必要な会計的センスの要諦が解き明かされる。ここで登場するのが、自分は仕事に秀でていると勘違いしている「できるつもり」の社員だ。

例えば、人脈づくりと称して異業種交流会への参加にいそしむ「名刺コレクター」。相手に覚えてもらってこそ人脈なのであり、交換枚数の目標達成を誇るのではなく、キーマンへの効果的な接触が重要と説く。

割引率が有利な大量仕入れも「まとめ買いの銭失い」と糾弾。売り切ることができずに不良在庫と化した結果、代金回収までに保管代

や棚卸しコスト、果ては廃棄損も発生することから、目先の利益に目を奪われず、必要な物を適時・適量に仕入れるよう助言する。著者の2作目である。デビュー作「東大卒でも赤字社員 中卒でも黒字社員」(リュウ・ブックス・アス・テ新書)では、やはりビジネスシーンで交わされる会話を題材に、入社3年目までの若手を照準に、会計的センスの基本を説いた。社内研修の教本として購入した企業も多く、読後の感想文を見せてもらったところ、社内評価が芳しくない社員ほど、会計感覚に欠ける会話の登場人物を「こんな人がいるんだと、人ごとに捉えていたという。」

「自分はできる人材、と巴」

著者は現在、香川会計事務所(尼崎市)に勤務。伊丹市出身。

(大久保 斉・経済部)

(中公新書ラクレ・819)